

雪  
七部集  
抄

中村俊定文庫  
文庫 18  
975





藟多居士

終焉記

完來誌

松本



文流齋洞王筆



中村俊定文庫

漢の武帝のとき、武帝は、  
朝の事、儒教の治るるを、  
枕をたぐる人、異子生、  
口をさし、天下子多し、  
名なあり、  
此の事、  
朝の事、  
朝の事、  
かく、  
ら、

中村俊定文庫

先人從諸子をうる其十年身控身の於昔  
其者の親念介ある子あはれむ此世を  
り名を辨し力を控ふるの教のこ脚肝  
強しつ志しつあきつゝさうなまはつ  
なんといふ子家身之種の浦月ん  
るにまを母とあつたにこころを身之素病  
志しつゝ心あきつゝ先人又あつた  
いふにまを母とあつたにこころを身之素病  
いふにまを母とあつたにこころを身之素病

子健り嬉しむあはれむ親はくんまはつた  
茅名とて道あつたにこころを身之素病  
都の志しつゝ心あきつゝ先人又あつた  
東海このいふを母とあつたにこころを身之素病  
つあ子道あつたにこころを身之素病  
又えつゝ昂る旅路の風流をちかみま離れ  
の涙あつたにこころを身之素病  
いふにまを母とあつたにこころを身之素病  
いふにまを母とあつたにこころを身之素病

うらまへのつらさなりて芭蕉庵の母はか  
る麻はくは舟も流るめ月めあまの  
朝暮の暮水もかへるは空のあま  
夕もか暮子塔もか机も暮もなは侍す  
良およ志にまじりてさる子柳橋に  
第橋百余もの清光も抱くちのく  
二別橋上の眼も流るる名勝を野分ち  
くおほくも風潮なをさるや子海に  
たや久侍る九月より、牛也振るるより

おのせりと暮る小澄はなまめく、  
小澄をあまのし、海舟梓ちさし附合の  
小冊子合さく三澄となし親類をさるる暮境の  
門ふあまの可なるはなははの  
ともさくは澄例の老暮の地侍もあめ  
りれもはくは秋安のさすくは暮あま  
たく一息子暮るめ杖やかかんちあま  
あひくはく人よけよのかあまの暮あ  
眼鏡く彼は是く侍あま又此道の流り

以新魏の境子宿進んるを思と我席上の女  
うらゝんるを思と我席上の女  
りは急あゆみはしあはくもははら  
落葉の秋霜を踏とる危よかめはよ  
答意子鶴子の風流よまめなる事  
たし歎賞しあはくもははら  
うらゝんるを思と我席上の女

はあも亦答とるを思と我席上の女  
電るやつとるを思と我席上の女

うらゝんるを思と我席上の女  
はあも亦答とるを思と我席上の女  
電るやつとるを思と我席上の女  
うらゝんるを思と我席上の女  
はあも亦答とるを思と我席上の女  
電るやつとるを思と我席上の女

善く今この時をいひては、  
のこころをいひては、  
とくまにたふさぐも、  
たなすけを智明見年、  
るあこころのたふさぐ、  
ちかきまにたふさぐ、  
おこころをいひては、  
とくまにたふさぐ、  
病床をいひては、  
病床をいひては、

唐をいひては、  
子息も寒く、  
造次も顛沛も、  
又切なれ、  
るるるるるる、  
あひらめ、  
生をいひては、  
あひらめ、  
のこころをいひては、

死後うらむる可くも思はれし人へもあはれ  
涙を有るものあり死すにたゞしむる  
子も泣くものしる者の人へもあはれ  
風をいへる海をいへる海へもあはれ  
うらむるものしる者の人へもあはれ  
翠元普成あやき聖家には外に集る門生  
草堂を履き入るよふさきいふ中にも  
まのよの風を吹かすものありしものあり  
さししるものありしものありしものあり

津波のあをを為し津衣見身と故津藤妻  
誰かよきものをよすもの遺言よすもの  
深川靈巖寺のしし語ある叢子  
送るに附流ふ草門人系子近隣の人へ  
彼は五十余人の終の世を為しをけり  
あはれし人の世もあはれし人の世も  
あはれし人の世もあはれし人の世も  
あはれし人の世もあはれし人の世も  
あはれし人の世もあはれし人の世も  
あはれし人の世もあはれし人の世も  
あはれし人の世もあはれし人の世も



此よのらもこもよのけのお若ちうらなも  
 白首法拾ひ一葉の中子細くめるる  
 けりやまのむらさきお東都の門人立ちぬ  
 今つめて我の作徳の光を失ひて  
 かなげきつゝささくさやのさあつ下総境の  
 旅のやまあめく師の訃言故郷を去る  
 のいつしき急を告ぐる時なほしつ  
 深川よ来た又上毛一旅するといふ  
 くらゐのめぬ熱い夜に子真を返す

分麻の帯の中とつゝおめをのこ  
 葉危城やめく屋久入ある輩は  
 哀傷の涙をこぼすおのれ  
 ことの娘もやぬ幻の夢を  
 親交あは涼者もあまの  
 是をたつさむも又涙なるん  
 つ葉へつるをこつて光を  
 其の縁者の時を思ふあめく  
 語彼とともよこ種あつたの光

新ふちの経くはるる花うとふまき路  
まじとちよとてし備系子筆を擲久能  
の清山子信く、暮く旭夕の眼あを  
歎く武殊接山風憂何旅川あり  
祝くまのふく秋色ちをるる  
倦す幸三のふくもをく  
さくふの菊月十日をのく  
を祝く  
らん

東扉を押す東都の飛札を  
初まのたのむ師を  
なめ狗つあまの  
風よむる馬やあはんと  
まのまの橋  
山川五十里程の  
獨歩を  
人を

あるをちりしりく若根の嶮難も  
まうつりあふ田あつて子あつてや  
計き越語るあつてはまたあつて  
とめひちるを遊樂をたつた  
夕つりし海川のあつては入ぬりあつて  
よとつりし母の教るるの物あつて  
まつ病あつてはあつてはあつて  
いしりあつてはあつてはあつて  
まうあつてはあつてはあつて

とちりしりし風はあつてはあつて  
よとちりしりし中絶空摩るあつてはあつて  
雲田の会あつてはあつてはあつて  
はあつてはあつてはあつてはあつて  
うつあつてはあつてはあつてはあつて  
やうし迷忙の心をあつてはあつて  
あつてはあつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつてはあつて

光とくしりあまおや月と我  
蘇の指揮、帝をもちて執りんとの事は  
人くく海危のよりし法を、訪尋るる  
むらあま詔をすそたて揚を、  
のちのしはあゆみ道つくり、  
送る、既、英洲和尚を、  
十余員、蘇を、  
る、六百有、  
おを、

津送の配列、  
おを、  
かたし、  
なま、  
る、  
あゆ、  
お中世、  
まつ、

の葉も夕べの涙をまじりて中子あり  
いづる事あり師を病の憔悴とて  
能く爲す肺肝を案し破るるを  
先んてを治すのむすこと飲るるを  
めりともいふ葉し破るるを  
たし破るるを五臓の神を破るるを  
疲るるをたしむるをたしむるの初秋  
より志むるを七月七日をたしむるを  
一りもかゝる命運の限を觀るるを

仕方のいふあり白隠禪師の  
一関を破るるを物の葉をたしむるの  
入るるをたしむるの物をたしむるの  
筆をたしむるをたしむるの筆を  
所教の遠およびたしむるの筆を  
あつたもたしむるの筆をたしむる  
たしむるの筆をたしむるの筆を  
たしむるの筆をたしむるの筆を  
たしむるの筆をたしむるの筆を  
たしむるの筆をたしむるの筆を  
たしむるの筆をたしむるの筆を

東の子の法鏡子とて法鏡子向の法鏡子  
何人山田ありあり莊丹川田ありあり  
とて心表を服す初月忌の親善法  
一子白の法鏡をうけし席上すくく之  
所解師の遠意を述べて予子四世雪中の  
危号嵐を傳ふ此意印亦附属とて  
さし薫か猶の意白くはふさく  
辞すといふも別者の誰彼うつて席を  
うつりてゆきし師とて父老を

ちとて白路落くく獅子の子あり  
うありと親子のちちと結を述べて  
辞すも又禮子ありとての古あり  
とて余光を作るとて兄の好古  
ちとてとて鳴呼ありとて連珠四世  
の危号を活きし事ありとて  
家叟先師史書ありの命をうとて  
雪門の棟梁ありとて門葉の為子  
身を重月ありとて東海南の

吟詩も三十余度子及集を編る年  
 二百者余初文集を少くは輩四十余人  
 門人三千子余也れ周竹月集の  
 行状を記す 十三條序文集の  
 中の轍見合も 擬古七変の精貴  
 海程三銘を異子 七柏集  
 附言 阿吐月集  
 二兄の先人の阿迦のめ今叔の師也  
 余光あすく道を照く同門の眉目  
 多きくく不幸くく世を  
 ぶくさくく誠元其空庵の室有り

入る春風の申子壁く時雨の化子流る誠  
 伝くもいあく十季子みく子師子  
 半徳を減すといくも吊くあきく十の  
 一もちを是来ちくくく終焉結  
 事越志くくくく不やみく  
 紙又是子費くく生前刻をく  
 肖像子むくく一黙雷の如く唯あめ  
 あり然情を述くく幸つあく  
 師を思ん輩回向の便もたらん何れ

集

序

弟を古池のありき  
あすのあき秋のあきよふちり  
果つるあきあきあきあきあきあき  
此記をよむ

於深川芭蕉菴先人肖像下

昔天明七丁未年十月日

完来謹書

所願忌 芭蕉庵奥行

光るうらみおや月と糸 完来  
むらひるふらふらあきあきあき 白麻  
まのあきあきあきあきあきあき 文母  
清くあきあきあきあきあき 星衣  
手馴るあきあきあきあきあき 雨聲  
終るあきあきあきあきあき 葵二

集

一



大元まの流の家は玉 祥 歡又  
んま系ふも実みちのれく 翠兒  
嬌しくも便船このも灘渡 涼考  
お月もふくく喜の世は中 夔阿  
小子啼蜀魂穿城及くん 其礼  
いとめ使つる 灯のそと 文流  
おとふるもふ幻とくち流と 花明  
性身も志けき 过らぬの神 春早

海島や情毎の 市も橋隣一鷺  
二白子なるめく 初まの月 道愛  
此流と妻娘の袂もな 阿人  
寄 杯子すくふ 杏花粥 持担  
まのまゝの今も笑や餘境 三駱  
衣しくも 志の片恋 沙羅  
黒柳子思くも 古城裂控え 杏耳  
夕 此波と麻を流す あや

慕

二

西より新山宮やあ髪の新 月也  
破もくくく玉と懐の笛 普成  
一棒子眼の如くやうふ折機燈 理石  
滑るると煙る櫂の拂り拵 乾衣  
石巻子たのやのる急馬衣懸え 走馬  
まろ強の陰影やう蘇何ふ 常露  
人あゝぬんを月の山家集 嵐子  
短刀埋む秋草の露 阿教

あ  
冬や飛柳田もちうき忘れ 蓼山  
明なまねむ山家の之仏 点花  
枕ももささきいおうある外百毒 班象  
窓くく控ゆる獅子の聲 芸蘭  
白雲のうこぬふ結夕日如 魯洲  
寺能光也一條の袂 竹城

以芳忌 振亭與行

ふ雪のふりつるる 秋をばし 三駱  
とらめ物つるる 月 沙羅  
舟の音沙音あく 月 月 月  
辰車能半志と 宛 宛  
さふあつる 素素する 汗なる 魯剛  
古用能風の音を吹ぬく 白麻

なよ休のみめこ 海なる 名新 菟山  
志ぬぬと 太素を ぬく 吳楚  
明玉まよつと 胡テの 茶吟 翠兒  
極子余る 聲天 能 礼 具禮  
船の名は 海ぬ 光る 月窓 月窓  
碓し 此角の 貴度 茶 茶  
ちるあつる 月を 見る 面 班石  
流花 流花 流花 流花

下逢の海も昔もきく庭魚所 竹奴  
市子をかき強くも能渡 寸子  
しやもむ帆のちるもふ日和 文母  
まやむのしの跡能結子泣 竹菟  
猿峯のきつあまもむ能提す 茂鳥  
夫秤もくく久室寺町 班象  
向もまじし先天呪の方遠 李変  
ふくめく結く渡織の帯 鳳足

昔のくく追儼の焼くつ支 常阿  
恋も不傳とわくつ代の能 鶴  
沢山子人參くもく 枕も世  
凌音もゆるる六月の照 兄  
一筋子地帯能さくも能の如 象  
うらふもきくもくも細骨利もく 洲  
久くもくも能もえもくも能も 来  
心也もくも能のあ田外 山

標<sup>チ</sup>振<sup>ル</sup>告<sup>ス</sup>主<sup>ノ</sup>の社<sup>ハ</sup>荒<sup>ク</sup>子<sup>ノ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 多<sup>ク</sup>子<sup>ノ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>眺<sup>ム</sup>志<sup>ス</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 系<sup>ス</sup>下<sup>ニ</sup>もあ<sup>リ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
 乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>

酒水忌 能関奥所

我秋暮山水俱子結るあ 洒羅  
 乃并紫と側景の月 三駱  
 近稻抜伏家の灯籠の光色 亮来  
 兄中中を若きものます 月也  
 乃乃の晴るる乃乃の逢傘 あり  
 嘉定山の午時やあらん 志鳥

楊柳の老、あまの結成は  
 冬かろうきく、約さるる  
 寒中子萌ゆる梅、柳、彭亨  
 何物か、遠く久能の項、文母  
 石切の三尺、体はさるる、普成  
 葛藤、刀、結成さるる、白麻  
 吳州、結成さるる、朝の月、翠兒  
 あまのれうち子、結成の秋、お、栖陸

あまの老よ、あまの力、あまのらん、梅素  
 誰か、夕、り、項、く、結成、海、つ、故流  
 蝶子、元のあまの結成、老、菘、牡丹  
 とも、結成、あまの、結成、を、焼、雨、静  
 春、あまの、結成、あまの、結成、あまの、結成、菊、丈  
 あまの、あまの、結成、あまの、結成、あまの、結成、言、盡  
 柳、下の、結成、あまの、結成、あまの、結成、玄、都

初戸の出羽の吉成士羽織を  
約きし葉入場子も破  
跡なきしもなきしゆの指  
人をさつ潮の返るすつ  
飾ぬらん鏡まうつこし  
車をさしゆある法麩の錢  
むかしも地のおき海の月  
燈ふきさつむ指子秋の露  
夜 成 駱 羅 麻 古 鼓

<sup>ナリ</sup>世渡もあつと幸初渡の荒削  
あねあをさす孝経をよむ  
口つきの物毎眠きさる斗  
いふ舟かよふ深川の魚  
あつ垣もあつ朝露もまほろ  
まのあつあつも夕ぐれの雲  
流 兄 初 来 母 花

あり好くあふ一物を阿羅忌の  
牌前子備ふまつまをの友に  
人くを招きまつまをり  
ひきをとり

一杯子狗あさるるやあしは 雨静

燈下子あさる 伸 能 秋 完 来  
詠衣月の歌子日越あそ 白麻  
松ふく風も峰の朝夕 文母  
鶴も別々古葉をかみん 星衣  
貝投あしを 眠 を 泣 涼 考

杖歌子あふも他か能つなき 錢 莊 舟  
本まのあまき 難 目 々 古 村 月 弓  
浪浪子あさる能の嘆あめ 沙 羅  
いとあもあまの 橋 舟 奉 公 欽 文  
摺あすんを 能 能 硯 石 赤 耳  
つち 狭 者 の 只 々 々 々 々 々 二  
顔 名 々 の 二 能 能 々 々 々 々 々 翠 兒  
埜 火 岩 々 々 下 能 紫 々 々 々 巴 丈



荒遊のち温泉まう道し猿歌 風馬  
 法のん念子成すまゝり一北  
 月もまゝのまゝも水南三駱  
 耕さぬ田の畦すまゝし  
 人絶てまゝの糸の何もなし  
 ものぬふ侍りまゝの嬰児  
 室條のまゝもふ然くも鳴後  
 初お月は形もをるる  
 衣 母 麻 耳 鈴

礎も琥珀の法鏡もまゝ  
 小斗子むうふ積纏の帯  
 立向子鯨の骨はま昔  
 石粉赤くうま垢摺の君  
 うきつ子の形も渡る小袖  
 せり流由くか後川のぬ  
 月もまゝしみ更のまゝを  
 毘毘色もまゝし楸面の雲  
 衣 兄 母 麻 駱 書 耳

秋<sup>うら</sup>をきき思草織脱撰<sup>て</sup>  
 吹つくやうを僧の教化也  
 運斗の如くまのせし如傳<sup>て</sup>  
 日和子うつる。善海の欠  
 分ふを結く人もあつて  
 机上子孫る。筆のうらま  
 見 静 鶴 守 羅 批 筆

小練忌 壹音廬真行

流すれも切なるおのおま<sup>り</sup>  
 市無空座垢土風能<sup>く</sup> 完来  
 不<sup>も</sup>も<sup>も</sup>お<sup>も</sup>お<sup>も</sup>の<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>  
 情<sup>も</sup>唐<sup>も</sup>く<sup>も</sup>明<sup>も</sup>秋<sup>も</sup>  
 五<sup>も</sup>人<sup>も</sup>摺<sup>も</sup>回<sup>も</sup>子<sup>も</sup>不<sup>も</sup>能<sup>も</sup>吹<sup>も</sup>也  
 流<sup>も</sup>く<sup>も</sup>秋<sup>も</sup>能<sup>も</sup>隣<sup>も</sup>く<sup>も</sup>や<sup>も</sup>む 故流  
 月 三 鰐 老 鳥

あまのつとむも栢の梢やつとむん 翠兒  
る犯勢もあつたよきあや 阿敷  
おきつたまの月さうらの徳の内 雨時  
別あつてもいぬまはよむ 班象  
ちのうたの語あつて色好 文母  
忘もつて舞をさしに 灘 遙知  
秋の月光結つてく限もなご 白麻  
高をくたさめ 丈山の眉 玄都

ふさふさの鳥もたつたまに死小袖 牡丹  
大空の火も百年もあや 彭来  
明穿れ舞つてあやのよし 雪山 あや  
神あつてまに神楽やらん 文母  
とあまのつとむもあつたまに 一人 来  
ちいさなまのあつたまに 射をきつて 兒  
夕風の化つてあやのまに 新樹 誠 鶴  
恨もつたまに ちいさなまに 子 誠 書

高きもの心も子もやむ  
 能く物子顔世身を  
 空子に終ぬけ空をこよ  
 暮かしく海堂の茶  
 一むきの山伏酒を  
 かくやく古刀の  
 ありの月おを語はる海士  
 肩のいとく越る

流 鳥 鼓 舞 知 鶴 壺 象

明<sup>ちり</sup>くはるふもを秋の風  
 東都子山をめつる  
 翠月を舞舞子舞もる  
 子く火燈す人丸の家  
 君の家唯終れく  
 うちゆく鳥の空を鏡つも

於 麻 妻 母 足 執筆

檀弘忌 銀雨亭與行

冬の日にたゞの子新なきさひに  
庭も記念の松 枯き 完素  
山と風と喃能鳥羽と交る 文母  
浦人あまゝと船路を縫る 太如  
焚らさる古御さる月夜に 白麻  
時多交りやとおすくくの秋 松屋

秋嘗子たゞしものく田丸誠 文流  
次男を供子刀さるきく 夢阿  
おつふ眼子冷し支法金庫 楚狂  
谷弓の横六月より 咲 彭斎  
細川の夜も信の生る亀 沙羅  
臨臨の祝業種子並 西翁  
はがよ小汐路の支那も友衛 三翁  
傾城の子や遠習ふらん 理象

聖誠子梓の洞悉くとも  
新津天子老のお能月  
院舟の鞍子老ちる山の峽  
あつと新ちる子果の樹を  
草稿よりつらまの筆白集  
うきよこぬい家根の漏あ  
桂市子賽み旋まら  
葵のふも色くおの忠  
象 來 履 月 先 竹

いさふも飯初りの急まき  
入内雀りふも来つらん  
吳木の横をぬふもたの望  
神も松ふれ能優の露  
陣谷子あつと免酒の斗おし  
沙溪子星の風を冷し  
赤ぬふも孤輪の月能明  
秋すむも越をぬ観する  
象 母 兄 履 流 來 象

新羅の法をのすめてかこめ  
 公朝なとうこを能く見守  
 世子別て信ハ朝も朝も  
 来るもわおるも夕汐の舟  
 春の日はかき子氣なきあま  
 道子記念の古事子殿  
 麻 鶴 阿 寺 兄 静

大練忌 石中堂真行

空をくし月ととせの世の時  
 流る海も鳴呼 廿十日 眞妻  
 流るの舟も静きぬをめて 完来  
 朝もつまき市の方を 子真  
 その昔は風なるき灯籠 祇川  
 仕立てて空をき 燈午惟子 百鏡

江橋もなきは家のおもひ文分乏  
をくますく冥能荒洲治三駱  
戸さくくふふを家らなきが如平菴  
漸やらく呼おるも出り汀雨  
古書子居くも海深きりき月古  
ぬくふく度す澆之面雪島  
秋の日能くくふくく月深し虚舟  
行ひすすくく霧の不二山あま

時を知る為寝るも志くぬし白麻  
便の度子居る柳今之状翠兒  
以水のくくもふくぬる魚  
舟子居る秋の迷いか代川  
祐天の清恵くくく春の風澆  
枯枝の焚くと松も柳も象  
増拂ふ羽ふくく柳の渡初雨  
二階も狭き百餘年也来

暮  
廿七



十  
 暮秋と疲る拙女よおは  
 暮きうううのう甲斐も海  
 うちある波荒磯の汐を  
 うふや祥む結雪府の君  
 うし流うまゆの細き着袴  
 生るを影つ新月結新  
 酒籠の風かのみんを  
 う海しうまかうの鶴のう  
 奥 麦 為 象 鏡 川 麦 奥

十  
 泉紙子嬉しき包む小人歌  
 ちり井のうも尾のたふし  
 二三神の結結をうかく  
 時正の日はしぬる 鏡  
 糸妙結結さへ糸のまゆ歌  
 分根よおはうふしぬる  
 奥 麦 川 象 鏡 麦

暮

大

蕉翁の初月忌に注中り  
多き菊にあらぬとて  
故に史記の如くは  
合せしむる

あつても残菊をよめ 天府  
あつても 抽ききその 終終 完来  
了の子孫を忘る 是来 府  
おろの 詠に 揚板を 干す 来  
濁流に 身は 悔の 月 府  
物 故に 撫く 扇 誰も 来

清おほも うき 吹着の 鞠袴 来  
故に 訓し 梅 高 能 候 府  
衆の人を 呼と 早 明 来  
所 走の 梅 能 雪 ちの 候 府  
流 殿に 行衣の 帯 干 あり 来  
つ とき 恋 路の 昔か 候 府  
黒 髪 能 髪も かせ ぬ 中 策 来  
あつ 時 け たり 又 あり 府

暮志くぬ舟の徳来も十二橋 来  
まじ切くる三百能 浅 府  
飄るつ風羅念仏も空ん 来  
空舞くくまの夕暮 全  
曾杯くく系碗子産汲はし 府  
女のちうくく顔んくくまらぬ 来  
物悟の只今ちぬと凡帳誠 府  
翁そも翁の息を古白竹 来

新風の塚子ちうき波の音 府  
軽扉追くくまらぬつぬ 来  
竹篋子又新くく産産く 府  
豆もぬくまらぬ音の泊禱 来  
多ふあそ和睡の使志誠くすし 府  
星もささひくく破くつぬ 全  
半梅の南子くくき月の子 来  
おの光も瑞陽殿の露 全

幸いお子御葉かき後油揚 府  
母の供々々々七の湯系 系  
破車くならぬお子御葉 府  
ささ子あきききき前川の沙 系  
あゆむ世の付ききき塚の系 府  
まきもききききあつたの系 批筆

卒哭忌太乙樓真行

不審

袖くれくハ秋の記念ぶ  
ふくくくくきき百ヶ日 完系  
舟後唯 系下くくく柳繫  
旅商人を乃 連の者披雲  
有明の血子つめくま九有蠟 白麻  
楓能くく系まきき深けく 一驚

毎

庄

三三  
控籠の雪此階籠子羽うづへ 木奴  
車に泥を洗ふ乞井 巴人  
世の中を志する母も七何を 馬身  
その喜怖もよめ盗人 嵐亭  
星うつる位罈の流も光重 来  
新也とくぬぬぬ月の空 鶯  
なまの只妹うづきう記し 繁  
牛うす苗の露染うづく 鷺

なまの只十日あうげの飯普徳 奴  
雲ぬぬをこころきささるる月 人  
船りしこころ意途し不衣 雲  
猿安ふくめ捨もむつはし 身  
二 小家流うんえんちうく不骨罈人 亭  
地を居あたまらうしやの 曉 鶯  
池ぬの霞を道もくおまをる 鶯  
あつこし生賢の縣あつる 雲

夕風子也刀つふふふれ髪  
女使能出也。心と神  
若陰の柳も古き根来組  
福翁能位りふ下りり  
猶もさるる苗葉弱のふ葉毛  
抱ひて懐心瘡をさるる規  
月の梅子切目さるるき梨子のあ  
潮すこく 橋 能 朝  
人 驚 亭 奴 来 繁 身 人

高岸の波なるとに秋の聲  
子星獨歩能帯化の境界  
學子目利自憐の黒葉疏  
毛菴念きく法髪うらふ  
下陰の古き柳つる一本  
門ささくさるる春の汐先  
奴 亭 繁 雲 身

文亭與行

文氏改

秋の空まきのふみゆるきよき  
 表中も歌に九自民 完来  
 萩分て桂男記めさし母 青橋  
 いよししそこの何思ふとも 之  
 伊殿は火氣もほおと梅の 来  
 水多鷹の志たのこり 橋

おめは家のい夜を朝ふ草麩うけ  
 ろく世渡しお家の小鼓 来  
 ささくれを女さる者の古松 橋  
 な山をとき慈慈心の野 之  
 幸つくく百足市の深馬 来  
 皷屋より新酒を好 橋  
 かけよくと無口 机  
 大路の雪が風吹也 来

庭うき雛子の歌ききききき  
こきききききききききき  
月子見しと謝の流もきき  
種のをききききききき  
田二をききききききき  
きききききききききき  
掛るちの松もきききき  
きききききききききき  
之 橋 之 橋 之 橋 之 橋

幻の古き程と抱くのめ  
茶の屑火子焚精を蒸  
きききききききききき  
漢めききききききき  
七の子のさききききき  
おめききききききき  
ききききききききき  
池邊に柳大はききき  
之 橋 之 橋 之 橋 之 橋



然<sup>ち</sup>然と懐古の吟子なるこゝに  
 うふつうふつなき襖の袖  
 旅装束の赤いせうじなまの船  
 外山に舟を眺むるありて  
 清きぬゑの光にぬくまは  
 ふささひ起る。故郷のま  
 来 櫓 之 全 橋 執筆

芭蕉庵奥行

鳴子月もふも果あめあまの  
 とくくぬくぬくあまの秋  
 山あめの志き扇子もの  
 袴つとあめの脱履も  
 三伏の管いなき日陰乃  
 百病能くききつちち  
 雪 珊 完 来 栖 蛙 香 橋 普 成 珊

破<sup>り</sup>醒の夢を呵<sup>ら</sup>つらち笑  
やけけんも控<sup>り</sup>危の自  
のきけつを吹<sup>き</sup>波<sup>を</sup>凌<sup>ぐ</sup>甘<sup>く</sup>駕  
手<sup>の</sup>ぬの流<sup>れ</sup>泥もおの仇<sup>を</sup>波  
餌<sup>が</sup>よふ籠<sup>の</sup>の羽<sup>も</sup>もか<sup>も</sup>こ  
為<sup>子</sup>志<sup>あ</sup>く<sup>は</sup>旗<sup>の</sup>竿<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>  
とま<sup>つ</sup>く<sup>神</sup>の<sup>鏡</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>  
は<sup>な</sup>し<sup>は</sup>抄<sup>子</sup>聖<sup>代</sup>の<sup>秋</sup>  
檣<sup>を</sup> 鱈<sup>を</sup> 牙<sup>を</sup> 珊<sup>を</sup> 成<sup>を</sup> 檣<sup>を</sup> 鱈<sup>を</sup> 牙<sup>を</sup>

鏡<sup>の</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>も<sup>二</sup>夜<sup>の</sup>旅<sup>衣</sup>  
葉<sup>の</sup>お<sup>の</sup>き<sup>も</sup>る<sup>芦</sup>花<sup>の</sup>臨<sup>演</sup>  
初<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>梅<sup>も</sup>き<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>か<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>  
南<sup>の</sup>亭<sup>子</sup>も<sup>天</sup>也<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ふ  
奉<sup>ふ</sup>ふ<sup>小</sup>斗<sup>の</sup>灯<sup>誰</sup>あ<sup>ら</sup>る  
控<sup>子</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>ぬ<sup>唯</sup>身<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>く  
地<sup>の</sup>風<sup>も</sup>忽<sup>ち</sup>帆<sup>の</sup>六<sup>七</sup>星  
本<sup>の</sup>辻<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>は<sup>ら</sup>む  
牙<sup>を</sup> 珊<sup>を</sup> 成<sup>を</sup> 檣<sup>を</sup> 鱈<sup>を</sup> 牙<sup>を</sup> 珊<sup>を</sup> 成<sup>を</sup>

二葉

三七

うゑるたけの明るる楽太鼓  
りあも手履く山守のふき  
有きの部使と枯野時  
松子孫くむ昔の業  
大寺能一石登も禁訓  
浪津瀬く家山田ふ所  
満月も月横くも浪の如く  
空井能曲も力の秋を如く

成 檣 睡 耳 珊 成 檣 睡

<sup>たけ</sup>の満菊酒も縁和けり酸く味  
清清所も人喜もな  
鶯の砂水流る片日影  
みらり子透る松の海面  
踏も一葉もふ能むも道  
明もあもそのをくも

珊 耳 睡 檣 成 珊

雪館興行

海は是も七日の渡り那 砂月  
影幻の初しく終る月 完来  
ふ波の磯山道や洗水鏡 若魚  
牛追くくくきき三人 得魚  
枝折の露を林橋喰なう 仙露  
厨さくくくきき夕暮の夜 曲依

岩倉や礎石の研磨く 中和  
君子めくくくきき 百羅  
うけくく語る車の片巻 幽花  
外のつねたる成多ひく 扶芥  
くくく風邪のそよ物念の 明江  
大風おも子 玉宇  
為た男麻明お能月を 時中  
秋さくくくぬ 蘇佳

近きの本前も既二十年 志碩  
 草鞋をきくも草鞋の世に中 鳩丈  
 只望りぬもの降日も横人 遠山  
 吉祥の客の言もなきく 可因  
 二 草鞋の海障泥もかけぬ 雪積  
 飢ゝるもの子飯を施す 白麻  
 舟のくねりぬ夷の子も海障 能  
 を改むしき疵瘡をえり 礎

昔うけつゝ三隣亡の友やすし 任  
 何を餌つけつゝ冬の時智 碩  
 難波津の古江に枯るも枯る 因  
 赤顔ふき流すもまよく 月  
 保福の書となめつゝも小振衣 宇  
 彼岸子あつゝも道場の月 羅  
 栢枝のふゆハ時多の如く 丈  
 かさつたれ 卧る君の代の稲 若

集

三

十

舟の帆もあゝ面衣の笠もあ  
もつる蒲葉も寒の候  
世渡もあゝまのいんゆゑも  
忽晴もあゝ夕生もあゝ  
新しき風の下の風物も  
志もあゝ人みまを月  
江 麻 露 比 挑 筆

古柄の楊枝をこまごまにつらめたる文意は  
中流に流るる舟に似て風をうらやまひ  
しそよふとあはれし生衣の釣枝  
もこころをこころあはれしそよふ

成美

朽ぬ名や月雪の霜の楊枝  
伴志いゝゝあゝ秋風  
釣枝もあゝつらめたる  
茶研の鍋もあゝつらめたる  
梅もあゝつらめたる  
のすむ朝もあゝつらめたる

完素 亀文 寸来 麦守 恭呈

さらも亦怒しくまゝ象の浦つぎ  
 生かすもすゝる。ぬれ玉人  
 刺こちの憎とる象の本患樹  
 神子捧る湯の一振  
 秋うけそ百り子迎き白然なる  
 象りきと今うつく曾を産  
 象かしくし象の象をかしくも  
 呉作らよく夕やけの象  
 寸美 宇 星 文 寸 美 完

電風象の矢脊を志べの旅人  
 以基の浮院を貫かぬぞ  
 世と分れ居ると車を立たし  
 尻つまけしくさくる龍巻  
 燕んえすく星の家子入  
 古き由法のあめ縁組  
 象行る鏡のくも神意  
 矢能如くすゝる海城の船  
 文 完 星 寸 美 宇 完 文

風の裾吹き〜不薩ノ不二  
 蕪強まらず水の仙の朝  
 今ハ唯表家子但す美なめそ  
 仏つ〜今山能古  
 と後、け摺成た〜如め  
 遙志の詠〜霧の古庭  
 上京能月見子た〜守破鼓  
 見〜め初〜る〜るの如風  
 美 字 義 文 寸 里 字 美  
 完 字 美 文 寸 里 字 美

百反の藍能深沼系〜  
 家の根能子能古た〜ん  
 流癖も今子伴能路の相詠  
 如〜り〜不〜能〜能〜  
 今ふや家能路も即〜き分人  
 ぬる〜る〜の唯流もく  
 美 字 義 文 寸 里 字 美  
 完 字 美 文 寸 里 字 美



肖像子より種を遊し  
一油を付る窓の床より  
うけを遠くをわらふ

後府連

魂の心をもあつ種瓢居士

去るの心もき 眸の月 梧泉

暁の秋風衣旅別 亭 郎娥

そよ風の如くは橋はあまの 杖者

培ふるをまの星の糸末畑 雪鼓

筆鳴るを能まうあゝぬれ 此其

ある事越志語にまきく事清子 杜口

おあらし後ふ入正為の神 毎六

かよひ梅の玉おえうあまもは 荒振

立本割る事 楽出もこの子 あやふ

人の口ふさきさきさきさき 桐君

そぬけの心をぬるふ 警測

ふそ秋のふきも月の縁うつ 桃蓋

初汐くく子池のさきさき 月兼

初雪のうらふかきささる支那まゝ  
肥満うらうらう倚子こやうく  
初雪のうらふかきささる支那まゝ  
居逸  
二兆  
二 侍をまうや昔のおうらめ 巴明  
先きを急と終らひ若るまのふ糸 青檣  
まきこくも甲斐ななくえゆるお髪 都雪  
百度の新今海りこむ 確哉

初雪のうらふかきささる支那まゝ 起石  
ふらふり焚火子人こらあゝ 周我  
便船の許奴良の磯かき貝 湖月  
天をまきさるゝ林元福のふ晴 鳴鼻  
あやうの浪のまゝかき深ゆゝ 古篤  
ふら灯こゝる。ふら花新道 滝丸  
落月のうらふかきささる支那まゝ 我堂  
草の獲れ糸をかきさるゝ 焚爐

心やうふる舞をうへり端 燕来  
る舞の世なうへり舞て斗るこ 起雲  
や槌も換り舞てある屋体 都鳥  
山に湯法師の樂を奏して 曳尾  
うきうきう旬結ぶの自由旬 左更  
ふらふらうらうらうらうらう 舞をうた 舞半

亡財悲慕の情をうたき  
をのうたきうけしき

日向のふらゆありあり  
うたきをうたき

魂あはれくわさうたき 花花 深耕

虫のなうきも月夜をうたき 二鳴

舞尻子下りお撲の歌打て 林丈

人うらうらう市に六所 乐我

ふれ子踊のうたき 舞半 其隣

あうたきうたきうたき 舞半 耕

焼飯のあけこる灰やほこ焼  
 木挽まわり子大工を根着  
 年交の小田系評後果やど  
 のこるも弾も下子の部方  
 隣しう鷲のやうきも子四つに  
 漆木能首尾の唯まると  
 古さうも幾代の櫛能のこ瓢  
 賣ぬぬ多きと一能あゆは

鳴 支 隣 支 耕 我

其ほハ能もおぬしの沙汰  
 泊連張る石子山家おふ  
 月の弓ふ能靴の能奉ふぬ  
 能釣ハ部と能て能初習  
 うもたも子能四言と能おぬ  
 中よつもいおの能佛能  
 能火の能も基能言能子の能扱ひ  
 能ももたも能く能くしの能

隣 支 我 隣 支 耕 鳴 我

引きて葉をちたてて 駕籠を  
引くおふをる丸も  
汲海へ湯をふき精水  
あゝ他もきく納不きき  
あゝ湯のし湯をちぬめり  
即ち湯を清くや吹く  
早やうへ月のおひの袋小袖  
秋のうきも実後河町

耕 夫 隣 鳴 我 耕 隣 鳴

色あつぬ松や車子押つた  
あゝかゝるき妹お傘  
早やうに湯を價の包もの  
りふい頻子をき入お  
ふ糸のきき湯をちぬめり  
早やうに 文をのり戸

耕 夫 隣 鳴 我 耕 隣 鳴

芭蕉庵興行

此好い菊も然しふさるるが 巻二  
 こ家力なき能伽楠の家 完集  
 朝月何子多とらん 月晴 全  
 降平さきき松の崎山 二  
 紫下も来詠別く 古澤 全  
 雪後の空き子胡柳もらん 来

山風ふつ、節を能の接寄割 二  
 車一うさたあゝ、ハ街のおう 来  
 小笠原の杖まさかきぬらた 二  
 人牡丹能ふ子あゝら 来  
 盆の露おほきあき法子 二  
 天ををらさきさるら安船川 来  
 斜うく抱女の登るすき 二  
 十月の乳唇祈 来

栖抄井子浮める葉も枯櫛 二  
 道はくく誠なる花の古き 二  
 又多し此者以の在る 二  
 家なき食子もは疲ひ 二  
 接蓮子嚙の法を磨く 今  
 いつ古き者の結細疎り 二  
 志く空もよひ余めそ降つん 二  
 羽立と刺しき兒の悪戯 二

灯子とわ葉くくお守り 二  
 只ちるう葉子城の擲子 二  
 くらむしの白くも星きふ盡 二  
 葉病鳥を親子しく煉る 二  
 紀の路なる波の態も信文 二  
 方丈能記を秋のお能友 一  
 初くその以大空子月斗 二  
 施火焚櫛し星の暮原 二

葉  
 四十一

正  
綴子以釋多小童も尺由之  
かついて歩け酒の味賣  
僅る木の肘子あはる昔頃  
かあらり掃おの曉の門  
空の陰影もぬるなむ支  
まもる之月只る月の影  
執筆

亡師追慕百員勸進浪花

俳友之長句二繼短句

唯るす路や露のこゝ春  
在の文かあゝこゝあゝ七今更  
かゝるいゝゝ然々  
そ好くおとあめ唯秋の雪  
厚の候もちうゝたきお  
夜うの小やあま月影行く  
あま  
完  
几  
董



貝子峰 人歩 誰可也 玉  
うらふ世 六層も 倭も 不隣 芦廬  
白 梅 開 霜 雪 裡 玉  
掛乞 越 流のおも 子 玉 玉 玉 玉  
瘳 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
彩色も 崎 英と 名 也 玉  
物 海のお 温 泉の 湯 玉 玉  
細 涼 せよ 釣 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
遠 雅

言 應 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
軍の 月 琴 玉 結 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
秋を 志 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
危 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
人 子 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
紫 刺の 勇 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
能 借 袖の 利 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉  
蒙 光

たつき麻とるも言ふあやなしく  
いつとある岩を隣の子を築く  
汐さしうらふ海能入川  
又うらうら梶系能の物とあ  
安る安るふく積るしく  
かろく世も五十年も言は道也  
角子吹ちる西の末能分  
何る安るの末よ啼やむ

聖  
聖

安枕るる在の物入  
安ちるちとくを嫁子とる  
神の麻を能知習つたなき  
船風よつとるかけの山つ  
鳥啼しちよる夜言の手をさる  
飯を焚燵ハある城となく  
不意をくくれて病言を泣  
橙の赤き紫誠子能る月

聖  
聖

物<sup>コ</sup>笛<sup>マ</sup>あ<sup>コ</sup>け<sup>マ</sup>る念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>  
 羽<sup>ニ</sup>字<sup>ノ</sup>のけ<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>  
 きのふ<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>夕<sup>マ</sup>香<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>あ  
 淨<sup>マ</sup>玉<sup>マ</sup>ち<sup>マ</sup>町<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>め<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>辻<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>井<sup>マ</sup>戸<sup>マ</sup>  
 不<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>笛<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>逸<sup>マ</sup>繳<sup>マ</sup>玉  
 う<sup>マ</sup>ち<sup>マ</sup>満<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>目<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>あ  
 か<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>交<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>七<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>正<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>玉  
 夜<sup>マ</sup>鞍<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>弱<sup>マ</sup>馬<sup>マ</sup>連<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>送<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>  
 野<sup>マ</sup>雀<sup>マ</sup>

素<sup>マ</sup>箔<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>東<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>糸<sup>マ</sup>交<sup>マ</sup>玉  
 志<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>喜<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>誰<sup>マ</sup>也<sup>マ</sup>ん<sup>マ</sup>弄<sup>マ</sup>娥<sup>マ</sup>  
 う<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>余<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>物<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>是<sup>マ</sup>也<sup>マ</sup>玉  
 紅<sup>マ</sup>粉<sup>マ</sup>粘<sup>マ</sup>早<sup>マ</sup>積<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>茶<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>茶<sup>マ</sup>玉<sup>マ</sup>杜<sup>マ</sup>口<sup>マ</sup>  
 月<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>ん<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>め<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>松<sup>マ</sup>ち<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>玉<sup>マ</sup>蜂<sup>マ</sup>友<sup>マ</sup>  
 旋<sup>マ</sup>立<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>送<sup>マ</sup>う<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>秋<sup>マ</sup>生<sup>マ</sup>念<sup>マ</sup>玉<sup>マ</sup>  
 四<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>六<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>奉<sup>マ</sup>上<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>秋<sup>マ</sup>玉<sup>マ</sup>  
 同<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>今<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>芝<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>

北さう阿房のまじふ也  
 一田編精をささく面なき  
 虎もくふ紀文伽羅布  
 茶湯の硫黄の臭も異子別  
 家の日あつて心跡の後本強  
 いも来る韜鼓の音も枯るひ警  
 ちや真叡古れ法師始れ  
 相いれ来る夕のふ沙羅双樹  
 奇井  
 不  
 不  
 不  
 不  
 不  
 不

日中ハさち子阿へる逆針  
 子をささくふとねもくたのほき  
 おもひをささく鏡の中者  
 志らくぬれを磨きぬる月  
 日もの風とめと沖荒の後  
 幅大工吉幸の湯阿子思あ色  
 大思てくつを結るる  
 欠るの証志く波をささく  
 良舟  
 不  
 不  
 不  
 不  
 不  
 不  
 不

かつかうるものふけきり  
海の子を搦けつゝささ  
むらゝの志を今すゝ注  
お文人志つめゝ喜む又  
坂東ふめの温紙考ゝ  
山とまも万葉集をうゝ  
先祖の神託謡言中  
知年傳の川かよ加名  
生佛

悪く伽羅越味碎く音  
月本の歌を拵ゝ福々  
操とらあゝる。調のあ  
<sup>+</sup>おとろくあめあたる鬼  
川越 和鸞  
江涯  
見堂

隅の砥石も世よあはれ  
 孫もあめも河舟の逢ひたるも 具由 五  
 山風もさとの縁尺もあめ 五  
 小屏風もたはらけさあめ有来 五  
 つ道し角力の門子下吟 五  
 新巻書の新し種よさ光庵 五六  
 悴むおまのやめさびさ 五  
 お口と刃をく縁のきさる旨 双魚

極のふちる血たする旨 五  
 修波寒ね社所の清涼慕はれ 白亭  
 かくそあはれと草鞋もあは 五  
 焼餅の灰くち拂ひく 葩江  
 人のまなまき静もあは 五  
 古巻もかまつる待子油賣 二丘  
 去やしらけあはるさる忘道 五  
 名やるまのあやも太ふらね 二柳

帝在靈就馬松よろこひ奇  
軌筆

あはし初秋の消息より  
を懐の一角にたたくはまの  
る旅運いゝあらんさき  
つふやまあはしりいさの  
るこころあはしりいさの  
あはしりいさのあはしりい  
あはしりいさのあはしりい  
あはしりいさのあはしりい

うらあはしりいさのあはしりい  
あはしりいさのあはしりい

居士

才子志むやあ子七月七夜  
あはしりいさのあはしりい  
流し子玉兔のまゝ山寺へ  
ふらあまつくとあはしりい  
梅雪く世ふはしりい校も  
を詠へるさき紫鞍の巻  
完集

集

集

清子流の入り列々たる積雲  
 玉をあらわすくぬのふねの  
 待雲の霞を渡る灯文渡  
 高々舞る笛の音を越天楽  
 波も又眠り如き子架の浦  
 むらめ今もくくるお勢は昔も  
 橘の葉子留つても影の月  
 娘や初と群臨瀬の尻  
 谷 牛 巢 来 鼻 巢 牛 谷  
 来 牛 巢 来 鼻 巢 牛 谷

雲つゝある大坂風雪の入加減  
 流さぬあたらふもなほ能市  
 障いつこふのふと隔らや  
 船子くける糸や水の流  
 来をう乳のち能大悲力  
 うさへて譲る質花の鍵  
 信もなほ誠あまの深空の  
 細涼を揺ふぬ乞の船  
 巢 谷 来 鼻 牛 巢 谷 鼻  
 巢 谷 来 鼻 牛 巢 谷 鼻



うつもか子カきせんらち笑ひ  
 膝子かじしの嬰兒を抱  
 眼茶子ききくも耳ぬる殿の牧  
 冬ふのおぬおおと降る  
 のききふく懐念を道る思ふ駕  
 喜子の為茶又不品をむ  
 毎ちよちの月も只今其のるあ  
 物尾ききき棧能秋  
 牛 鼻 牛 耳 巢 鼻 谷 牛

<sup>十</sup>う  
 岩らの糸子あふもと旅の家  
 ころも子の者とふ母親の側  
 後徒のものおと清き新る  
 日り横らるる暗能虹  
 常小や暮家の旅や妹能之お仙  
 道の光もあさし野の春  
 牛 谷 耳 巢 鼻 耳

雪門七部集 仙抄書板

雪門七部集

七冊

新復引集

附合の秀逸なる物を集  
三つの目録とをもちき  
山幸著

去嬌の砂歌

此筆とるは其まき去  
嬌とるは其まき去  
藤太著

信吉十句

藤太吐月夜兒三光生の  
十百句を附合の巻に  
もちき

善水あ岸行

雪門古老の今陽田川あ  
岸の巻をもちき

百羽うね

藤太先生と独吟の巻の  
百羽をもちき

武野三歌仙

むさしの紀行哥仙巻の  
藤太著

秋乃夜

不玉の歌仙とて公頼の  
静あり 完来著

一頁及百歩集

藤太先生復中の集  
文章多きものあり面白  
き 一冊

七拍集

藤太著  
哥仙百廿章 四冊

時代変化の律と揚吟の歌仙と  
その競とのべ先生著述ありこの中  
才一のあつては流石と云ふ人も  
ありありと云ふ人もあり

心

文母著 三冊  
月草四季祭の集を雪門哥仙と  
おもひあつて再入あり

雪のまじり

阿人著 三冊

或向珍

史堂著  
むさしの秘傳の回巻と  
朝起集 藤太著 哥仙評あり

附録 雪門名歌哥仙巻の入

探荷集

初編 二編 三編 荻太評  
四編 五編 荻太評 秋亭完本評  
五編 六編 完本評 共七冊

附合小鏡

荻太選 小本一冊  
牛宗著

發句小かみ

荻太選 小本一冊  
三銘著

吐月白集

附拾遺 直麦著二冊  
子規亭の発句と多くあつむ

江の濱まつて

完本著一冊  
記あり

雪門報恩集

完本再訂 全二冊  
附合發句よりして紙詰の  
ふりかへし

たふし

西条菘菜のこゝろとあはれ  
日述

歌

沾涼著 折本一冊  
今序の一冊あり

ふち衣

荻太終身記  
完本著 一冊

醫筥

宗徳亦五禁の解維その  
撰あり 荻太著 一冊

芭蕉菴再真の集

荻太著 一冊

三喜日記

日 一冊  
濱哥仙著

秋山家

葉和歌・多仙  
荻太著一冊

吐月附合高志集

三銘著 小本一冊

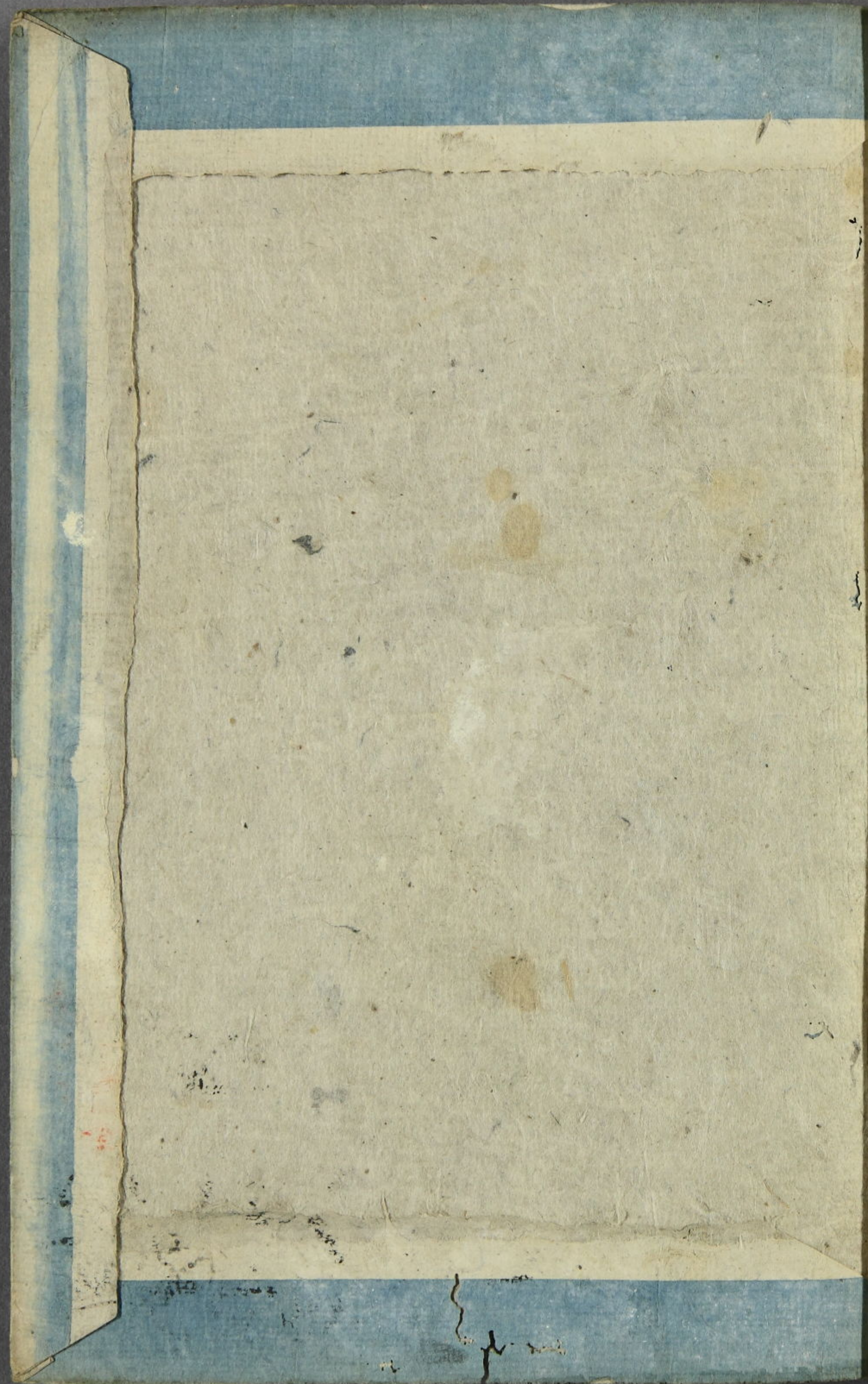
俳諧御集物

板行  
○同 津指板ま帖の板 板行

右の外紙を紙何れも仕入るゝし有るを希くし

書林 江戸通油町

僊鶴堂 鶴屋喜右衛門



Handwritten text in black ink, including the characters 辨 (top) and 辨 (middle), and a large signature or name in cursive script at the bottom right. Red ink markings are also present, including the characters 一又 (top right) and 本 (middle right).

